

平成三十一年度 入学試験 (平成31年3月2日)

「国語総合」

戸田中央看護専門学校

一、次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。(問一の解答は記述式解答用紙に記入すること)

現代は承認への不安に満ちた時代である。自分の考えに自信がなく、絶えず誰かに認められていなければ不安で仕方がない。ほんの少し批判されただけでも、自分の全存在が否定されたかのように絶望してしまう、そんな人間があふれている。

黒沢清の映画『トウキョウソナタ』(二〇〇八年)には、こうした承認への不安による歪んだ態度が、家族という最も身近な人間関係の中に(あ)シユウヤクされて描かれている。

主人公の佐々木竜平は、会社の総務課長として家族の(い)セイケイを支え、それによって父親としての権威を維持している、ごく平凡な人間である。強圧的というほどではないが、子どものやりたいことには即座に反対し、ろくに理由を聞こうともしない。しかし、実は会社からリストラされ、そのことを家族に告白できないまま、毎日スーツ姿で出勤するふりをし、ハローワークに通い続けている。就活先の面接では、「あなたは会社に対して何を(う)コウケンしていただけるのですか?」という(A)シビアな質問に、返す言葉が何もなく、屈辱の日々を送っている。

竜平の自尊心を支えているのは、家族から権威ある父親として認められている、という一点にすぎない。もちろん、こうした家族の承認が自らの嘘によって維持されている以上、その自尊心が(え)キョウイに満ちたものであることは、彼自身もわかっている。しかしかたちだけでも父親として認められることで、自分には存在価値がないのではないか、という疑念から眼を逸らしている。

【a】、妻と子どもも本気で彼の権威を認めているわけではない。妻の恵は竜平が失業したことを知つていながら黙っているし、長男の貴も薄々気づいている。それにもかかわらず、彼らは何も知らなにかのようにふるまい、父親の威厳を尊重し続ける。次男の健二にしても、父親を尊敬しているわけでもないのに、決して(一)には逆らおうとはしない。彼らは家庭内にある暗黙のルールに従い、家族の微妙なバランスを崩さないように気を遣っている。

一般的に家族は、「ありのままの自分」を受け入れ、認めてくれるような安らぎの場所が理想とされている。ただ存在するだけで無条件によるこばれ、本音を出し合える関係性。そこでは「偽りの自分」を作る必要性はまったくない。それが大多数の人間に共有された理想的な家族のイメージであろう。

しかし現在、多くの人が家族に対して本音を隠し、「ありのままの自分」を過度に抑制し、家族の求める役割を演じ続けている。そうしなければ、家族という(二)を維持することができず、相互に承認しあっている微妙な関係が壊れ、自らの居場所を失ってしまうからだ。しかもこうした不安から家族の承認が維持されている限り、そこには特に「認められている」というよろこびは生じない。

実のところ、このような偽りに満ちたコミュニケーションは、現代社会では家族以外の人間関係においても(お)ヒンバンにおこなわれている。

【b】、仲間の承認を得るために自分の本音(ありのままの自分)を抑え、仲間の言動に同調した態度をとり続ける若者は少なくない。仲間の間で成立するコミュニケーションにおいて、リーダー格の人間の気分次第で変化する暗黙のルールを敏感に察知し、場の空気を読み取りつつ、絶えず仲間が自分に求めている言動を外さないように気を遣っている。

このようなコミュニケーションは「仲間であることを確認(承認)しあうゲーム」とも言い得るが、

しかしその証は明確な役割や目的によるものではなく、(B)空虚なものでしかない。価値のある行為によって認められるわけでも、愛情や共感によって認め合うわけでもない。それは場の空気に左右される中身のない承認であり、以下、このような承認をめぐるコミュニケーションのことを「空虚な承認ゲーム」と呼ぶことにしよう。

家族や仲間関係において、相手の愛や信頼に疑いを抱くとき、自分は受け入れられているのかどうか、認められているのかどうか、強い不安に襲われるようになる。そのため、自分の考えや感情を過度に抑制し、本当の自分を偽って家族や仲間と同調し、無理やりに承認を維持しようとする。それはただちに「空虚な承認ゲーム」となり、必ず自己不全感がつきまとう。そして少しでもコミュニケーションに齟齬そごが生じ、その関係が行き詰まれば、自己否定的感情に襲われ、絶望的な気持ちになるのである。

では、一体そのような状況を脱する道はあるのだろうか？

『トウキョウソナタ』では、家族の全員が「空虚な承認ゲーム」の閉塞感に耐え切れず、家を飛び出してしまふ。妻の恵は強盗と逃避行し、長男の貴は世界平和のためにアメリカの軍隊に志願し、次男の健二も家族には内緒でピアノ教室に通い、音楽の世界に足を踏み入れる。しかし、ピアノの才能を認められた健二を除いて、誰も家族以外に承認を得る場所を見つけることができず、最後は「ありのままの自分」を相互に受け入れ、認め合いはじめたかに見えるシーンで映画は終わっている。

【c】、現実はそのほど簡単ではないだろう。「ありのままの自分」を(か)カイジしあつたとき、本当にお互いを受け入れあう関係性が築かれる、という保証はどこにもない。

問一、傍線部(あ)く(か)のカタカナを漢字に直して答えなさい。

【記述式解答】

- (あ) シュウヤク (い) セイケイ (う) コウケン  
(え) キョエイ (お) ヒンパン (か) カイジ

問二、傍線部(A)「シビア」の意味としてもっとも適当なものを、次の1〜4から選びなさい。

【解答番号1】

- 1、あいまいな  
2、冷たい  
3、気まずい  
4、厳しい

問三、空欄□に入ることもばとしてもっとも適当なものを、次の1〜4から選びなさい。

【解答番号2】

- 1、実質的 2、意識的 3、潜在的 4、表面的

問四、空欄□□に入ることもばしてもっとも適当なものを、次の1〜4から選びなさい。

【解答番号3】

- 1、システム 2、プロセス 3、コンテキスト 4、アイデンティティ

問五、傍線部(B)「空虚」の対義語としてもっとも適当なものを、次の1〜4から選びなさい。

【解答番号4】

- 1、普遍 2、幸福 3、顕在 4、充実

問六、【a】く【c】に入る接続詞としてもっとも適当なものを、次の1〜4からそれぞれ選びなさい。  
【解答番号 a〜5、b〜6、c〜7】

- 【a】 1、すなわち 2、一方 3、同じく 4、それぞれ  
【b】 1、たとえば 2、そのため 3、反面 4、もともと  
【c】 1、さらに 2、しかも 3、つまり 4、だが

二、次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

数年前のことになるが、私は米国人の言語学者T氏と東京で親しくなった。彼はもともとはアメリカ・インディアン<sup>(ア)</sup>の言語を専門に研究していたが、終戦後の日本に、軍人として<sup>(カ)</sup> チュウリユウしていたこともあって、最近では日本語の歴史や方言にも興味を示しはじめ、遂に奥さんと三人の娘を連れて東京にやって来たのである。奥さんはイタリア系の人で、小学校の先生をしている。

彼は古い日本家屋を一軒借り、畳に座布団、冬は炬燵に懐炉、そして三人の娘を日本の学校に入れるという、一家あげての見事な日本式生活への適応ぶりだった。

或る日、アメリカの学者の習慣として、彼は多くの言語学関係の友人知人を、家に招待した。まずイタリア風のイカのおつまみなどで、カクテルを済ませた後、別室で夕飯ということになった。一同が座につくと、テーブルには、肉料理やサラダなどが並べられ、面白いことに、白い御飯が日本のドンブリに盛りつけて出されたのである。

畳の上に座っていること、白い御飯であること、T氏たちが日本式生活を実行していることなどが重なり合って、一瞬私は、この御飯を主食にして、(A) おかずを併せて食べるのだという風に思ったらしい。目の前の肉の皿を取上げて、隣の人に廻そうとしかけた時、私はT夫人が、かすかにとまどったような気配を感じた。

間違ったかなと思つた私は、御飯は肉と一緒に食べるのか、それとも御飯だけで食べるのかと尋ねると、夫人は笑いながら、先ず御飯を食べて下さいと言う。

私はその時、はつと気が付いた。この御飯は、イタリア料理では、マカロニやスパゲッティと同じく、スープに相当する部分なのだ。

(B) はたして、それは油と香辛料で料理した、一種のピラフのようなものだった。

食事というものは、いろいろな条件に制約された、文化という構造体の重要な部分である。何をいつ食べるか、それをどう食べるか、食べてはいけないものは何かといったことに関して、どの国の食事も、さまざまな制限や規則が習慣として存在する。

カトリック教徒は金曜日には獣肉を食べないし、イスラム教徒は、豚肉を<sup>(ニ)</sup> フジヨウなものとして決して食べないというようなことは、誰でも知っている有名な事実であろう。

しかしこのように、何かを食べてはいけないという<sup>(ハ)</sup> メイジ的な規則は、外国人にも比較的判りやすい。ところが自分の国の食物と同じものが、外国の食事の中にありながら、その食物と他の食物との関係が、自国の食事の場合と違うという、つまり同一の食物の食事全体における価値が、文化によって異るときに、難しい問題がおきるのである。

白い米の飯は、日本食の場合には、食事の始めから終りまで食べられる。というよりは、米飯だけを集中的に食べることは、むしろいけないこととされている。おかずから御飯、御飯からお汁と、あちこち飛び廻らなければ、行儀が良いとは言えないのである。

そこで米の飯と他の食物との、日本食における関係は、並列的・同時的であると言えよう。お汁に始まり、香の物に至るまで、米を食べてよいのである。

ところが、食事の一段階ごとに、一品ずつの食物を片づけていく、通時的展開方式の性格の強い食事文化もある。西洋諸国ではこの傾向が強く、イタリアの食事も例外ではない。ここでは麵類や米の料理などは、ミネストラと称して、本格的な肉料理が始まる前に、済ませてしまうのだ。

私がドンブリに盛られた白い御飯を見て、おかずも一緒に食べようと思った失敗は、日本の食事文化

に存在する或る項目を、別の食事文化の中に見出したため、これを自分の文化に内在する構造に従って位置づけ、日本的な価値を与えようとしたことが原因なのであった。

文化の単位をなしている個々の項目（事物や行動）というものは、一つ一つが、他の項目から独立した、それ自体で完結した存在ではなく、他のさまざまな項目との間で、一種の引張り合い、押し合いの対立をしながら、相対的に価値が決っていくものなのである。

自分の文化にある文化項目（たとえば或る種の食物）が、他の文化の中に見出されたからといって、直ちにそれを同じものだと考えることが誤りなのは、その項目に価値（意味）を与える全体の構造が、多くの場合違っているからである。

一般の人は、自分の文化のこのような構造を意識もしないし自覚もしていない。そこで、自分の文化に存在する項目が、それ自体絶対的な、どこでも通用する価値をもっているように考えがちである。

この点は、ことばという、文化の重要な構成要素を正しく理解するために、極めて大切なことであるから、ことば以外の例を、もう一つだけ取り上げよう。

日本人が友人知人に会った時の、一番普通な挨拶は、おじぎである。ところが、その日本人が、この頭を下げる挨拶の代わりに、西洋人は一般に握手をするということを知ると、誰彼の見さかいなく握手をするようになる。つまり頭を下げる挨拶と、握手とを、互いに等しい価値を持った行動と解釈するわけである。ところが、実際には、頭を下げる日本流の挨拶を、日本人同士の間でもよい場合のすべてが、握手で置き換えてできるわけではない。たとえば、こちらが男であって、相手が婦人であるときは、先方が手を出すのを待つことが礼儀とされる国もある。出会った人の誰彼かまわず、こちらから握手することは、つまらぬ誤解を生むことにさえなりかねない。

以上の二つの例から言えることは、私たちが異なった文化に、しかも限られた範囲で接するとき、個々の文化要素を統括する全体の構造がつかめることは稀であり、多くの場合、自分が出会う一部、または特殊な実例を、一般的に拡大してしまう傾向があるということである。しかもこの一般化は、必ず自分の文化の構造に従って行われるということが問題なのである。

私たちが外国語を学習する際にも、いま述べたような具合に、自国語の構造を自分ではそれと気づかずに、先ず対象に投影して理解するという方法を取りやすい。従っているらと、**(C)** 喰違いが生じてくるのも当然である。

ごく簡単な例として、英語の break という動詞を考えてみよう。先ず、学校で「窓ガラスを割ったのは誰ですか」Who broke the window? とか「あいつスキーで足を折った」He broke his leg. などという例文から、break の使い方を学んだ中学生は、そうか覚えたぞ、break は「割る」とか「折る」という意味なんだと思ひ込む。

そこで英作文の時間に、この知識を生かして、「昨日大きな西瓜を包丁で二つに割って、それから八つに切った」というようなことを、I broke a big watermelon in two with a knife and …… と正しく書いたつもりになると、先生から、こじは break を使うのはおかしい、cut を使いなさいと直されてしまう。でも先生、break は「割る」んじゃないですかと言ったりすれば、それは時と場合によるので、馬鹿の一つ覚えみたいなのは駄目だよと叱られたりする。

今度は「腕を折った」から応用して、折り紙、折り目などに break を使うと、これも間違いで fold と言えと教えられる。

#### 〈 中 略 〉

ついに腹を立てた生徒が、「先生、英語は滅茶苦茶ですね。理屈も何もありやしない」と怒れば、「こ

とばは数学などと違って、理屈だけでは駄目です。注意深く、勘を働かせて勉強しなければ」というようなことを先生が言う。(D)生徒が自然な推理応用能力を発揮できないという意味では、(E)なまじ頭の良い生徒ほど、語学ができなくなるものである。

少し(を)コチョウウした話しだと思われるかも知れないが、この中学生の悩みは、実は外国語学習者に、いつまでもつきまとう本質的な悩みなのであり、大学生の書いた英作文でさえ、この種の誤りでいっぱいと言っても、決して嘘ではないのである。

(鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書より)

問一、傍線部(あ)く(え)にあてはまる漢字を、次の1〜4から、それぞれ選びなさい。

【解答番号あ〜8、い〜9う〜10え〜11】

(あ)	チユウリュウ	1、抽	2、厨	3、忠	4、駐
(い)	フジョウ	1、情	2、浄	3、醸	4、常
(う)	メイジ	1、治	2、自	3、示	4、而
(え)	コチョウ	1、誇	2、鼓	3、顧	4、抛

問二、傍線部(A)「おかずを併せて食べるのだという風に思ったらしい」とあるが、筆者は自分の体験をどうして他人事のように述べているのか。もつとも適当なものを、次の1〜4から選びなさい。

【解答番号12】

- 1、緊張していたため、その時の記憶が曖昧だったから
- 2、自分の失敗に対する照れを示そうとしているから
- 3、無意識の振る舞いのあまり、確かな記憶をたどれないから
- 4、お腹が空いていて早く目の前の肉料理を食べたかったから

問三、傍線部(B)「はたして」とあるが、これを言い換えるとするとどのようになるか。もつとも適当なものを、次の1〜4から選びなさい。

【解答番号13】

- 1、ドンブリに盛られた御飯を食べてみると
- 2、いろいろな観察し考えをめぐらせてみると
- 3、邪念を払い虚心坦懐になつてみると
- 4、アメリカでの経験をふまえてみると

問四、傍線部(C)「喰違い」とあるが、これを説明したのもとしてもつとも適当なものを、次の1〜4から選びなさい。

【解答番号14】

- 1、異文化交流が進まないということ

- 2、背後にある構造を見落としてしまうということ
- 3、異文化を認めるために支障が出るということ
- 4、異文化理解に見当違いが生じるということ

問五、傍線部（D）「生徒が自然な推理応用能力を発揮できない」とあるが、その理由として適当でないものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号15】

- 1、言葉の意味や使い方には構造があり、それは言語によって異なるから
- 2、「注意深く、勘を働かせて勉強しなければ」というようなことを先生が言うから
- 3、ことばは非論理的なものであり、勘を働かせて勉強する以外にないから
- 4、ことばの構造が言語によって異なるという認識が教える側に欠けているから

問六、傍線部（E）「なまじ」を他の語で言い換えるとすると、どのような語がふさわしいか。もっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号16】

- 1、それだけ
- 2、なんとなく
- 3、かえって
- 4、それなりに

問七、この文章の内容と合わないものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号17】

- 1、米の料理は常に本格的な肉料理が始まる前に済ませるべきで、おかずやお汁へとあちこち飛び廻って食べるのは良くない。
- 2、頭を下げる挨拶をする日本人が誰彼なく西洋人にこちらから握手をするのは、文化の構造を無視したやり方である。
- 3、自分のことばの構造をむやみに投影して理解してはならないという点には、外国語を教える側も教わる側も注意すべきである。
- 4、先生の「外国語の学習で最も大切なのは勘である」といった発言は教える側の発言として不適切である。

三、次の「」内のことばと同じ構成の熟語を、それぞれ1～4から選びなさい。【解答番号18・19】

18 「真偽」 1、道路 2、投票 3、是非 4、善人

19 「怠惰」 1、無償 2、需給 3、弊害 4、緩急

四、次の傍線部の意味としてもっとも適当なものをそれぞれ1～4から選びなさい。【解答番号20・21】

20 ある逸話について聞き手の反応がよければ「おお、この種の話は受けがいいな。では、この線で行こう」ということになるし…

1、皮肉な言い回しを含んだ批評的な話

2、おもしろおかしい荒唐無稽な空想話

3、そのものの特色を最もよく現すとえ話

4、世間にあまり知られていない興味深い話

21 病み上がりのように足腰がふらついて愕然とすることもしばしばである。

1、ひどく驚く

2、情けなくなる

3、あわててしまう

4、自己嫌悪になる

五、次の空欄【】に入る語としてもっとも適当なものを1～4から選びなさい。【解答番号22】

### 上【】下への大騒ぎ

1、や 2、を 3、へ 4、から